監督し、国史の監修、さらに日本全国の教育と教育事務を統括する教育行政の中枢的な役目（文部省の前身）があった。しかし、大学では洋学派・国学派・漢学派の対立があって、機構改革が大きな課題となっていた。処平が大学南校に入り、貢進生制度を建議したのはこの頃のことであった。貢進生制度とは処平が、米沢藩出身の平田東助（桂内閣では小村寿太郎とともに入閣）・丹羽龍之助（佐賀藩出身・後に処平と共に留学）・肥田昭作（出身藩不詳）らとともに、藩の規模に応じて一名から三名ずつ優秀な学生を入学させることを建議した制度のことである。

処平は、上京した際に小村寿太郎を大学南校に入学させようとしたのであるが、入学者は薩長土肥など維新を成し遂げた大藩の出身者に占められており、小藩出身の寿太郎が入学する枠はなかった。そのため寿太郎は、牛込早稲田の旧高松藩下屋敷（後の大隈重信屋敷。『英文自叙伝』には大隈伯爵邸の近傍とある）で紀州藩士山東一郎（衆議院議員・山東昭子氏の曾祖父）が開いた明治義塾で英語を学ぶことになった（『小村外交史』には教師を務めたとあるが、寿太郎は『英文自叙伝』の中で生徒として学んだと記述している）。

このような苦い体験があって、処平は、貢進生制度の導入に積極的であったのである。明治三年七月、政府は大学を一時閉鎖して大学改革を断行した。この時の改革で、大学本校は閉鎖され、外国人教師を増員するとともに、大学南校での人材養成をめざして、処平らから建議されていた貢進生制度を採用している。これにより小村寿太郎は飫肥藩の貢進生として大学南校への入学が許されたのである。

貢進生制度は、翌年の廃藩置県により、選出母体である藩が解体されたため廃止されたが、その功績は単に小村寿太郎を世に出しただけでなく、各分野で活躍する多くの若者たちを世に送り出す契機となった。この働きによってであろうか、処平は十月に大学権少丞准席となり、その直後には平田東助とともに大学の所管となっていた大阪洋学校（明治三年中月には合併して大阪開成所）の風儀矯正（学校改革）を担って大阪に向かった。大阪では長谷川復三（芳之助）という青年を見出し、十一月三日に唐津藩の貢進生として大学南校に入学させて、寿太郎のよきライバルとして競わせている。

4　ヨーロッパ留学

明治三年十二月、処平はドイツへ学制取り調べのため遊学を命じられ翌四年ヨーロッパへ向かった。同年七月十八日、政府は教育行政官庁としての大学を廃止して文部省を設置しており、処平らの西欧への派遣は一連の教育改革の中での施策であったのだろう。文部省の設置にともない処平の身分は文部権大丞となった。

処平はヨーロッパへ向う途中、西欧諸国の植民地となった民族の姿を目にして、明治政府による性急な欧米化政策や藩閥政治による弊害に、大きな危機感を抱いたようである。その頃の心情を明治四年五月二十四日付けでイギリスのロンドンから父長倉喜太郎・兄長倉訒・弟長倉雄平にあてた手紙に次のように記している。「東京の政局が不安定で心配する。兄へ、万一の場合は、隣国（鹿児島？）を信用して協力し、世間に飫肥の武名をとどろかせるよう」（『小村寿太郎』黒木勇吉）すでに将来の日本国内で政変が起こることを予測していたことがわかる。

その後、処平は当初の予定を変更して、親友の香月経五郎とイギリス・フランスで経済を研究したが、処平が予想した通り日本で征韓論をめぐって政変がおこり、処平と香月は急遽帰国の途についた。帰国途中、スエズ運河を通り再び西洋列強によって搾取される植民地のようすを見て、あらためて憤りを感じたという。帰国すると明治七年一月十日付で親を見舞うために飫肥に帰省することを願い出た。（宮崎日日新聞・平成十九年六月二十二日）事実上、文部省を辞して帰郷することになった。また、征韓論に反対した佐賀閥の江藤新平が副島、後藤らの説得にもかかわらず、東京を離れ佐賀

に向かったのは一月十三日であった。鈴木鶴子氏はその著書『江藤新平と明治維新』の中で、処平も江藤に同調して同じ船に乗船して福岡まで向かい、飫肥に帰ったという。ただし、この出典を探しているが現在まで確認できていない。

5　佐賀の乱と小倉処平

明治七年に江藤新平に同調して官を辞し、飫肥に帰省した処平は、郷里の人々に西洋文明の素晴らしさを紹介するとともに、持論であった英語学習を盛んに強調した。しかし、数年前まで攘夷論が沸騰していた時代にあって、人によっては素直に受け入れられない者もいた。次の逸話から処平が征韓論に反対して野に下った頃の考えを知ることができる。

ある日、処平を訪ねてきた警察官の和田勇もその一人であった。話が英語に及ぶと、和田は飫肥地方独特の令罵（あざけりののしること）的な語気で「エー、英語とは、あの蔓（つる草の総称）のような文字かよ、あんなものに忠孝（儒教にもとずく「忠義」「孝行」）の教えがあるのかよ」と吹きかけ、さらに「あの変わった形の文字などで、わが国の忠孝の教えを語れるのか」といって処平の鼻っ柱を折ったつもりになった。ところが和田の性格をよく知る処平は「いや、勿論英語にも忠孝の教えはある。逆に君に聴くが、わが国は朝鮮に国交を求めたが、拒絶されるという屈辱を受けてしまった。西郷隆盛先生は征韓論を唱えられている。これは忠孝の志から出たものである。しかし、西郷先生は征韓論が政府に容れられず、退官して鹿児島に帰られた。外国に侮られて口を閉ざすのが、祖国に対する忠義と思うかね」といった。幕末には攘夷論者であった和田も処平の言葉に動かされ、その人柄に信服した一人であった。

このように処平は、和田との攘夷について語っているが、枡本卯平も『自然の人小村寿太郎』の中で、小倉処平は自ら「日本の攘夷家」と公言していて、「世界のどこに、攘夷ができずに国を保てる国民があるだろうか。ただし、今自分が言う攘夷と幕末維新の頃の攘夷とは意味が違っている」といって、いつも酒の半ばで盛んに意気をはいていたと記している。もとより桝本は処平に直接逢ったことがないので、周辺の人たちから聞いた話である。

佐賀の乱（明治七年勃発）に敗れた江藤新平は、各地を逃走したあと処平を頼って飫肥に潜伏、さらに処平の手引きで四国に逃れた。処平は、この罪を問われて禁錮七十日に服役したあと、西南戦争に身を投じるまで上京して大蔵省七等として出仕している。

なお、江藤新平を捕縛する立場にあった和田勇の動向について複数の逸話が伝えられているので紹介しておく。それは、江藤新平が飫肥本町「米屋旅館」に潜伏していたときのことである。すぐ近くの番所に詰めて江藤新平の行方を追っていたのが、実は警察官であった和田勇であった。処平は秘かに探索の目をくぐって江藤らを外浦（南郷町）から高知県に逃がしている。立場上、処平と和田は相対する立場にあったのである。

ところが郷土史家・山之城民平はまったく違う逸話を残している。『近世飫肥史稿』によると「和田氏は、これ（前掲した攘夷について処平が語った内容）に動かされ、その後江藤新平の乱（佐賀の乱）では小倉氏の密旨を含んで佐賀に使いし、江藤氏等に会って小倉氏の意向を伝えた」とあり、また大正七年発行の『宮崎縣大観』も「和田勇が江藤新平を秘かに誘い、その徒のために土佐に逃れるための便宜をする」とあって、捕縛どころか逃亡の手引きをしたことになっている。小説風に憶測すれば、小倉は江藤の逃亡に協力した和田に類が及ばないよう、かばったのであろうか、事件の後も和田は変わりなく警察の職務に従事している。和田が本当に江藤新平の逃亡に関わったか否かは、信憑性を判断する資料に乏しく軽率に判断できない。「このような逸話も伝わっている」といったところで止めておきたい。